

平成 20 年（ワ）第 1978 号、第 2900 号 ウイルス性肝炎患者の救済を求める全国  
B 型肝炎訴訟・九州訴訟損害賠償請求事件

原 告 原告番号 1 番ないし 44 番

被 告 国

## 意 見 陳 述 書

平成 20 年 9 月 24 日

福岡地方裁判所 民事第 2 部 御中

原 告 佐 藤 美 好

### 1 肝炎発症までの生活

私は、高校を卒業後、現在の NTT である電電公社に入社しました。

私が働き始めた昭和 43 年ころは、電話が一般に普及しようとしている転換期であり、電話局や電話中継所が各地に次々と誕生する社会に活気のあふれる時代でした。

私は電気の専門技術を生かす電電公社の仕事が面白かったため、子どもの世話や家庭での時間を犠牲にして、仕事に打ち込んできました。

貧しい農家で育った私は、幼いころから、苦勞しながらもたくましく生きる両親の姿を目の当たりにしてきたため、私も絶対に人に負けたくない、人ができないことをやってやるという気概は、人一倍強く、それが仕事にもつながったのでしょう。当時、会社では採用された専門分野だけを勤め上げるのが普通でしたが、私は志願して異なる分野の仕事にも携わってきました。

誰よりも早く、最新の技術を身につけたいと考え、三重県の鈴鹿市にある会社の専門学校に入学し、その後に導入される電子交換機の技術を学びました。

また、電話回線を使って家庭のガスメーターを読み取る仕事にも携わったこともあります。

会社から請われれば、どこの職場でも行きました。各地の電話中継所、電話局、電気通信部など多くの職場を異動したため、転勤や配置換の回数は、人より断然

多かったように思います。

こうして、サラリーマン生活のほとんどを技術畑で過ごし、結果も出してきたと自負しています。

退職する直前は、大分県下の企業やホテルなどの大口ユーザーの電話工事・保守の担当課でした。大口ユーザーの電話工事・保守はその会社の休日や営業時間外に出向かなければならず、どうしても時間外の多くなる職場でもありました。しかし、自分が社内だけでなく、お客様からも感謝され、必要とされているということが実感できる仕事でもあり、忙しくも充実した日々を過ごしていました。

この仕事を定年まで勤めることに、何の疑問も持っていませんでした。

## 2 B型肝炎の恐怖

定期健診で肝機能の数値が高くなり、平成13年5月19日、大分の日赤病院を受診しましたところ、突然、入院するよう告げられました。

医師からB型肝炎の発症を告知され、病気の説明を受けました。B型肝炎は、肝硬変になるどころか、いきなり肝臓ガンに進行することもあることを知りました。

病院のベッドの上で、私は、2年前、肝臓ガンで亡くなった親友のことを思い出しました。

小中高の学生時代をともに学び、ともに遊んだ大の親友です。彼が危篤だと連絡を受けて、私は誰よりも早く札幌のホスピスに向かいました。死を間近にした彼の顔は、どす黒く変色していて、かつての面影はありませんでした。話をすることもできず、5日後に亡くなりました。

「私も、彼と同じように、苦しみを味わいながら死を迎えなければならないのではないか。

あと10年も生きられないのではないか。」

親友の姿が自分に重なりました。

退院して職場に戻ると、部下たちは、私の指示がなくても仕事を回していました。私に休日勤務や時間外勤務を割り振らないように気遣われました。病気になった私は、今までどおりには働くことはできず、自分の役割が失われたような無念さ・寂しさを感じました。

これ以上、勤めることで会社や仲間に迷惑をかけることはできないと思い、会社を辞めました。52歳のときです。

### 3 その後の生活

10年しか生きられないのであれば、母の介護をして暮らしたいと考え、田舎に帰りました。

両親が築いた田畑のことが気になり、農作業をしていました。しかし、農作業で体を動かすと、肝臓の数値が悪化します。畑仕事どころか手入れもままならず、今では田畑は荒れ果てています。

B型肝炎に感染した私の体は、両親が生涯をかけて築いた田畑を守っていくことさえできません。両親に申し訳なく、とてもいたたまれない気持ちになりました。

母の介護を通じて、お年寄りやその家族の方のために何かできることはないかと考え、老人福祉に関わるようになりました。

しかし、その後も自分の肝臓のことを考えないときはなく、心が安まる日はありません。

現在、抗ウイルス薬を服用して症状が出るのを押さえています。ウイルスが耐性を持ち、いつかは必ず薬が効かなくなるそうです。症状が再発し、肝臓ガンになるのではないかとすると不安でたまりません。

### 4 最後に

平成18年の夏、北海道の5人のB型肝炎患者の方が、国を相手に裁判を闘い、最高裁で勝訴したことをニュースで知りました。私の母はB型肝炎ではなく、私も子どもの頃の集団予防接種が原因で感染したとしか考えられません。

国の誤った政策により、B型肝炎に感染させられました。B型肝炎に感染したことにより、私のあるべき人生は変更を迫られ、築いた地位や仕事を奪われました。そして、いつも肝臓ガンになるのではないかという恐怖にさらされながら、今後の人生を過ごさなければならないのです。

国に責任を認め、謝罪してほしい。私を含め肝炎患者が安心して治療を受けられる施策を行ってほしい。それが私の願いです。

以上